

## ロルフ・W・ブレードニヒ : 大衆歌のイノヴァツィ オンスツェントゥルムとしてのハンブルク(奥野 不二子協力)(上)--研究資料

その他(別言語等) のタイトル	Japanische Übersetzung : Rolf W. Brednich : Hamburg als Innovationszentrum popular Lieder
著者	坂西 八郎
雑誌名	室蘭工業大学研究報告. 文科編
巻	9
号	1
ページ	147-156
発行年	1976-12-18
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/3364">http://hdl.handle.net/10258/3364</a>

ロルフ・W・ブレードニヒ<sup>\*)</sup>:大衆歌<sup>1)</sup>の  
イノヴァツィオーンズツェントゥルム<sup>(2)</sup>としての  
ハンブルク (研究資料)

(上)

坂 西 八 郎

(協力：奥 野 不二子<sup>\*\*)</sup>)

Japanische Übersetzung

Rolf W. Brednich : Hamburg als Innovationszentrum popular  
Lieder

Hachiro Sakanishi

「うたの研究」<sup>(3)</sup>と都市の伝承関係(問題)というのは、かつて一致したことのない概念の組み合わせである。われわれの専門領域民俗学の昔からの考え方・構想やこれに依存する伝統的民謡研究においては、都市は場をしめず、研究対象とされなかった。民俗学一般も民謡研究も、農民的一農村的伝承諸形式の収集と調査に如何に集中したことであろうか。村の歌唱機会、例えば織物部屋の、酒場の、また共同作業や、祝祭や民俗慣習などにおけるうた、これらが収集・調査の中心に位置していた。都市は、この遺蹟や前工業時代における「口づたえにより一文字を媒介としない」伝承に集中した研究方向の中で、民俗学者の管轄外にある伝承空間なのであった。都市の伝承物は「低級な音楽」の生みおとしたもの、価値のないものとして、それどころか有害危険な産物としてしりぞけられた。19世紀のうたの研究者で、今までに都市

や大都市で民謡を記録するという考えに到達した者はいなかった。調査領域としては、いわゆる大都市から離れた遺蹟地帯が優先的に選び出された。自分の家の前で生起したことを人々は気につけないものである。こうしたことの多くの例の一つ：著名な民謡収集家ルートヴィヒ・エルクは19世紀に数千のうたを発表し、また18,925編をくだらない未印刷の記載をのこした。だがかれの長年の居住地ベルリンで蒐集したものは、全部でたった11編の子供のうたにすぎないのである<sup>1)</sup>。

- (1) 原語 *populares Lied*。日本ではポピュラー・ソング *popular song* の用語が用いられる。これを日本語に訳す必要がないほど普及している。
- (2) 原語 *die Innovatiin*。以下「イノヴァツィオン」を用いる。生産的革新的再生の意。
- (3) 「うたの研究」*die Liedforschung*、これは「歌曲研究」、すなわち「芸術歌曲」の研究を意味せず、民謡研究を意味する。

原注1) 其他の例参照、ロルフ・W・ブレードニヒ：*Städte als Innovationszentren der Volksüberlieferung*。In：*Kultureller Wandel in 19. Jahrhundert. Protokoll der Arbeitstagung der Kommission für Lied-, Musik- und Tanzforschung vom 23. -25. 3. 1972 in Wetzlar*, hrsg. von R. W. Brednich. Freiburg 1972, S.63—68.

とりわけ19世紀のブルジョアの民謡研究は、非農民的な社会層、特に都市のプロレタリアートの演奏諸形式や音楽生活の調査を、計画的・意識的に研究領域から除外することを心得ていた。こうした確認<sup>(4)</sup>をいまさらこゝで論議むしかえす必要はない。古い研究に対する批判はいろいろに必要であるが、過去のことをゆるがせにしたことを論難するよりも、新しい手がかりのためのものの考え方、将来の民謡研究の可能な課題を問題としよう。

- (4) 参照、W・シュタイニッツ：*Deutsche Volkslieder demokratischen Charakters aus sechs Jahrhunderten*, 2 Bde. Berlin 1954, 1962, とくに第1巻および第2巻の序文。

本学会の設定テーマは、うたの研究の従来の構想に対しても新しい考え方もつように強いる。数週間前に、アメリカのインディアナ州ブルーミングトンにおいて、「現代世界の民俗学」というテーマによる研究会議が開催された。そこにおいても、一日が「都市の民俗学」というテーマにあてがわれた。この事実は、他の国でもわれわれの側と似たような問題がたてられていることを示している。われわれは、このブルーミングトン会議で次のことを学ぶことができた。すなわち、アメリカ合衆国では都市民俗学研究は今日までの所よい伝統をもっている。そして遅くともバークレーから生じたフリー・スピーチ・ムーブメント以来、フィラデルフィアのニグロ・プロレタリアートの物語、都市の売春婦やベトナム行きパイロットなどのうたを研究することは、もう決していかにわしい事ではないのである。伝統とは絶えず新しく創造されるべきものである、とするならば、——すでに19世紀にシドニー・ハルトランド<sup>2)</sup>が定式化したように——、どんな都市でも蒐集に値する—または研究に値する伝統を保持し示すことができなければならない。ここで伝統とは、とくにわれわれの伝統的な規範の外にある諸伝統を意味するのである。大都市民俗学は、従来からのありきたりのカテゴリーを都市の諸関係に適用しようと苦心したり、従来からの田舎についての収集や調査の方法を都市に移しかえようとのみ試みるかぎり、必然的に袋小路に入って外には出られなくなってしまう。大都市民俗学へとそゝのかされるわけは、伝統、継続性、共同社会といったわれわれの慣用的なカテゴリーや、伝統的なジャンルの諸表現、童話、伝説、聖徒物語、笑話、民謡などがもはや適切なものではなく、多様に新しい物によって置き換えられなければならないからである。

2) Folk-Lore Journal. Bd. 3 (1885), S. 117.

わたしは、自分に与えられた任務にしたがひ、うたおよび農村と都市の歌謡文化の差異をとりあげることにとゞまりたい。われわれが今日なお民謡について語ろうとするならば、すなわち、口頭伝承により一文字を介さず伝え

る、そして社会的諸機能を果すような伝承形式について語ろうとするならば、この種の伝承形式が局地限定的に具現される場所として農村が求められる。その基盤としては分業を行っていない農民の経済活動、あるいは前工業的な職人層が存在する。伝統的な「第一の存在」としての民謡は、工業化により狭い後進地帯に押しもどされた。生き生きとした原初的な伝承に関して、われわれは場合によってはまだ民俗慣習の・ないしは子供のうたについてならば語る事ができる。「民謡創作のための社会的な基盤は、単純な家計である。人々は自分自身の需要のために民謡を生産し、他の生産物を買うために生産するのではない。ゆえに使用価値が問題になる。本来の意味におけるいわゆる聴衆というものには存在しない。なぜならば、民謡は原則的にそれを生産（創作）する人の製品であり、売りものの商品ではないのだから。同時に、普通は民謡の文字による固定化は行われない。民謡の音楽は一定の生活状況を自然発生的に表現するものとして機能し、特殊な音楽的予備知識がなくても演奏されうる。交換価値と使用価値は未だ区別されていない」<sup>3)</sup>。

- 3) Sabine Schutte : Kunstmusik und Trivialmusik. Eine Problemskizze. In : International Review of the Ansthetics and Sociology of Music. Bd. 4 (1973), S. 81—93, うちとくに S. 88.

さてわれわれはひきつづき都市の民謡伝承のための諸基準をつくりだしてみようと思う。主な特徴として、歌の創作と資本主義的商品生産との結びつきを考えてみよう。都市に発生したうたは需要の充足に役立つのみならず、同時に付加価値の生産にも役立つ。それは、近世の初頭以来、都市の中心にあって、自由な使用に供せられた生産手段の助けをかりて大量に印刷され、広告により宣伝され、一定の販売機構により分配され、市場にもたらされ、そしてこの種々な製品は競争し、結局利潤とともに販売される。都市に由来する印刷された過剰製品としてのうたは、——ビラ、パンフレット、漫画新聞、うたの冊子、葉書、レコード、音楽カセット、流行歌（シュラガー）

帳など、それがどんな現象形態で現われるかということには関係なく——販売の成功や売れ行きや利潤に関してプログラミングされ、商品としての全条件を理想的方法で充たす。この性質ゆえに——商品としての性質のゆえに——都市の歌謡文化は、それが由来する土地の経済的社会的現実を構成する要素であり、そして現実を表現するものである。われわれは、農村という環境で民謡が死滅しようとしている伝承領域と、都市の歌謡伝承との相違を、おおざっぱ簡単に、古いものと新しいもの、伝統的なものと近代的なものとの間の対立に還元することができる。その際とりわけ「新しいもの」というカテゴリーを、民謡伝承を分類整理するためにひんばんに用いることは問題である。「新しい」ということは、中世後期以来の宮廷の変愛歌から19世紀のガッセンハウアーにいたるまで、伝統的な伝承を担う社会層の変遷、革新、更新の酵素として作用した<sup>4)</sup>。専門語「一つのあたらしいうた」、「二つのあたらしいうた」は16世紀の初頭以来、都市のうたの印刷伝承財におけるきまり文句、商品記号になった。

Walter Salmen : Das gemachte "Neu" Lied in Spätmittelalter. In : Handbuch des Volksliedes, hrsg. von Rolf Wilh. Brednich, Lutz Röhrich und Wolfgang Suppan, Bd. 2, München 1975, S. 407–420 (Motive, I, 2).

うたの研究においては、都市ではじまった商品「うた」が口頭の伝承に与える影響の問題は、比較的早くから認識されている。すでに19世紀初めにL・A・フォン・アルニム、L・ウーラントやL・エルクの様な収集家や研究者は、この大量に普及した安価なうたの印刷物を用いていた。かれらはこれを第一次的資料、口頭伝承と同じ資格のあるものとみなした。そこで「少年の魔法の角笛」以来の古い民謡出版では、口頭による文字を介さない伝承分野からの記録が多様な印刷物から生まれたものと並置され、同等の権利をもったものとされている。われわれは今日この文字による伝承領域に批判的に立ちむかっている。われわれはこれをまず商品、利潤をめざす商品生産者

の製品とみなす<sup>5)</sup>。この商品を携えて、生産者は一方では口頭の伝承分野に参加した。かれらもまた口頭で伝わるうたを受け入れ、文字を使ってこれを固定するという次元に転移した。そしてまた他方では、かれらはビラ、パンフレットという媒介物を自由に使うことができた。それらは新しく作られたうた、故意に普及されたうたの固定のためにもたやすく用立てることができた。近世初期以来、よく知られたるものとか、親しまれたるものというみかけのもとに、新しいものが絶えず現われたということは注目すべきことである。新しいテキストは、通常よく知られ流布されているメロディーのコントラファクトゥーアとして作られた。それゆえ内容だけが新しくかった。形式は新しくはなかった。印刷物をみると、この新しいうたがすでに人気のあるものと対をなしている。それは新しく採り入れられた作品も、すでに広まっている作品の人気を借りて利益をもたらそうがためである。こうした観点は、歴史的音楽文化の証拠としての民謡印刷物を用いる際、批判的な識見を必要とするものである。

- 5) Rolf Wilh. Brednich : Das Lied als Ware. In : Jahrbuch für Volksliedforschung. Bd. 19 (1974), S. 11—20.

これに加えてなお別の問題もある。民謡研究は過去において、あまりにも種々さまざまな印刷所による印刷資料の占有と解釈に甘じてきた。しかもこの文字による文献分野が、今日生産と分配の入りくんだ過程のほんの表面的で可視的な小さな部分を、言わば永山の一角を反映しているにすぎないということを考えなすすぎた。文書資料を歌謡伝承の革新、分布、受容の諸事件・過程<sup>6)</sup>の一部分の証拠として理解することが適当である。われわれは以下にポピュラーなうたの伝承の革新の中心地としてのハンブルクに眼をむけようとおもうが、うたのさまざまな脈絡関連を踏まえた眺望が明らかにされるべきである。データは——われわれの場合、うたの印刷物と記録であるが——一般的にみて、かなり良く記録され入手しやすいものである。これを防げる

要因は、つ、こんで明らかにする必要がある。

- 6) Günter Wiegmann : Theoretische Konzept der Europäischen Ethnologie. In : Zeitschrift für Volkskunde 68 Jg. (1972), S. 169—212, うちとくに S. 207 の "Realisierung des Kulturellen in Lebensvollzug" の指示,

あらかじめ言っておかなければならないことは、徹底的な研究が基礎にあつてこの報告がなされているわけではない、ということである。そうした研究は普通はハンブルクに居住してのみ行うことができるのである。本報告は、ためになりかつ多様な、今後の集中的研究が必要とする資料を提案しておこうというものである。ハンブルクの民謡に関する研究の模範として、ルーカス・リヒターのベルリンのガッセンハウアーについての論文が役立つであろう<sup>7)</sup>。この本はベルリンの様な大都市の住民もまた共同創作の多様な形式を通して、歌謡伝承の発生と普及に深い関与をなしうるという事をわれわれに証明する。ベルリンのガッセンハウアーは、大都市のうたのもつ紛れもないある特殊性を持っている。それは批判的で小生意気な言葉によって特徴づけられ、この言葉によって群衆がうごくという効果が発揮される。そして北部、中部ドイツの広範な領域がこのうたの放射を拒否できなかった。ベルリンから発した、あるいはベルリンで変形された、短命の、あるいは時折は実に命のながい流行歌は、19世紀以来すべての技術的手段に支えられていた。娯楽産業は当時すでにこの技術的手段を短期間にうたを大衆化するために利用したのであった。

- 7) Lukas Richter : Der Berliner Gassenhauer. Darstellung, Dokument u. Sammlung. Leipzig o. J. (1969).

似たようなコミュニケーション伝達路線と散布の手段は、他の都市においても提供されていた。われわれの見聞によれば、ハンザ同盟都市ハンブルクもわれわれがとりあげようとする一連の都市に入る。これらの都市は、その



特殊なかけがえのない歌謡文化を、自分のものだとして誇示し、都市周辺のうたの文化生活に決定的に大きな影響を与えていた。ハンブルクに由来する大都市の作品（うた）に対して偏見をもたず査定し、評価するため当然もたなければならない前提は、われわれがあらかじめある評価や先入見をもつということなしにこの作品に取りかゝることである。都市のガッセンハウアーは、うたの研究においては全くすたれたものとみなされていた。そしてまたこのうた自体、60年前にはありふれた評価を受けていたにすぎない。アントーン・ペンケルトはこゝに独特の強烈な光を当てたのであった。かれはいわゆる「音楽のエロ本」に鋭くせまった人である。かれの1911年に発刊された本、「裏街のうた」から引用してみよう。この点に関して啓発的に思えるのである。

「古い、小路の多い、もうゆるく傾いた壁〔＝ハンブルクの昔からの部分〕に、最近の、平板きわまりない、低俗至極なうたが響く。そのうたは、やっと数週間まえに印刷所を出て、おそらくあつというほど短い期間に忘れられ、思い出のうたとしてすらほとんど関心を持たれなくなるであろう。文化の継続と価値が保たれる所があるかと思えば、また一方こゝにはうつろいやすさと無価値しかない。最悪なことに、裏町自身は大都市の生活の流れからほとんど置き去られているというのに、その裏町のうた自体は、最も狭いが最も広く行きわたっている。最も古くからありながら最も新しくつくられる裏町通りを通して、自由にそして厚かましく一人よがりこのうたは流れてゆくのである」<sup>8)</sup>。ペンケルトとその同時代人にとって、裏町のうた、ガッセンハウアーは、「高貴なるものではなくなった民謡の末裔」<sup>9)</sup>であった。本格的な研究は、こうしたうたにかゝってはならなかった。——われわれはこうした前時代研究者をみならおうとはしない。われわれは意識的にハンブルクの裏町のうたを考察の対象に含める。むしろ中心点におきたいと思う。

8) Anton Penkert : Das Gassenlied. Eine Kritik. (Kampf gegen musikalische Schundliteratur. H. I.) Leipzig 1911, S. 5.

9) 同S. 7

大衆的な歌謡諸伝承のイノヴァツィオンスツェントエルムとしてのハンブルクが機能するための外的な諸前提は、16世紀前半にと、のえられた。この町に能力のある印刷業者が定住し<sup>10)</sup>、この業者がうたの印刷物の拡散にかゝわりをもちはじめたのである。1968年W・カイザーとC・デーンにより、16世紀ハンブルクの印刷物文献目録の中に編集された<sup>11)</sup>、最も古いハンブルクのうたの印刷物は、主として中世低地ドイツ語の言葉の装いをした世俗の歌集およびまばらな宗教歌集である。それら印刷物は、ヨーハン・ヴィッケルト d. J., ヨーハン・ロー (?) やハンス・ビンダーの印刷所で刷られ、木版画の飾りをつけたありふれた八ツ折り判で現われた。それらを本来の新刊ものと呼ぶことはできない。なぜなら、それらは大抵すでに前に南部ドイツの印刷所において、高地ドイツ語で印刷されたものである。ハンブルクで生じた明らかな事実は、低地ドイツ語への変形であった。それは一つの、例えばルターのうた<sup>12)</sup>の場合には特に重要な事象で、受容のための本質的な前提であった。16世紀の、部分的にはまた17世紀の歌謡生活におけるハンブルクの状況は、本質的なイノヴァツィオン(革新)の中心地としてよりも、むしろうたの復活再生の中心地である。17/18世紀のハンブルク研究にとっては、歌謡伝承に関して頼りになる文献の基盤がない。非常に多くのものが失われとり返しがつかなくなってしまったように思われる。なぜならば、うたを一編一編載せた印刷物に関する古事収集の関心は、18世紀から19世紀への転換期にはじめて発生したのである。

- 10) J. M. Lappenberg : Zur Geschichte der Buchdruckerkunst in Hamburg. Hamburg 1840, とくにS. 110 ff.
- 11) Werner Kayser-Claus Dehn : Bibliographie der Hamburger Drucke des 16. Jahrhunderts.(Mitteilung aus der Hamburger Staats-und Universitätsbibliothek. Bd.6) Hamburg 1968. Lieddrucke S. 157—162, Nr. 351—366; また Conrad Borchling-Bruno Claussen : Niederdeutsche Bibliographie. Bd. 2 : 1601—1800. Neumünster 1931—1936, Nr. 4697 ff. 参照。

保存されている資料の重点は 19 世紀にあるから、われわれはこの時代に関心を集中させる。18 世紀の終末の状況を簡単に回顧することからはじめよう。こゝでは、新しいものの最も重要な仲介物としてとくに「社交のための（または無邪気な）新しい歌集」に触れておこう。この本は上流階級用の歌集として、全北ドイツに普及した。こゝからわれわれは、この本が社交の集まりの際みなどで一緒にうたうテキストとして用いられたことを知る<sup>13)</sup>。

- 13) H. R. Ferber : Die Gesellschafts- und Volkslieder in Hamburg an der Wende des vorigen Jahrhunderts. In : Karl Koppman (Hrsg.) : Aus Hamburgs Vergangenheit. Hamburg 1885, S. 27-75 とくに S. 30 ff.

(昭和 51 年 5 月 20 日受理)

- \* ) フライブルク大学 (西ドイツ) 民俗学科教授・ドイツ民謡文庫主任研究員
- \*\* ) 日本独文学会々員